

Jon K. Chang,

*Burnt by the Sun:  
The Koreans of the  
Russian Far East.*

Honolulu: University of Hawai'i Press, 2016,  
x+273pp.

かみ なが えい すけ  
神 長 英 輔

## I 研究史上の位置づけ

著者のジョン・K・チャンはアメリカ人で、ロシア（ソヴィエト）史・アジア史の専門家である。マンチェスター大学で歴史学の博士号を取得し、カリフォルニア大学ロサンゼルス校などでの教履をもつ。現在は在野の歴史家として中央アジアとコーカサスの諸民族についての研究を行っている。

本書の主題は、ロシア（ソ連）極東から中央アジアへの朝鮮人強制移住（1937年）である。1937年半ば、党と政府の決定によってソ連極東地方に暮らしていた17万人あまりの朝鮮人が中央アジアのカザフスタンとウズベキスタンに強制的に追放された。この朝鮮人の強制移住は、ソ連における一連の民族強制移住の最初の例だった。

評者はこのテーマに関する英語圏の研究状況にさほど通じていないが、管見の限りでは、朝鮮人の強制移住を主題とした英語による包括的な専門書は見当たらない。本書の出版は価値あるものといえる。

ロシアを含む旧ソ連地域では、1990年代以来、このテーマの研究が一気に進んだ。研究史の紹介は他に譲るが、包括的な研究書から史料集、事典類にいたるまで、すでにかんりの研究の蓄積がある。

また、1945年の日本の敗戦後、ソ連に占領されたサハリン南部（日本領樺太）には強制労働を強いられていた人々も含めて約3万人の朝鮮人が暮らしていた。ソ連当局はこれらの朝鮮人の引き揚げを許可せず、彼らは1980年代末までソ連から出国できなかった。このサハリン残留朝鮮人についても、1990年代以降、研究がめざましく進み、ロシアを

中心に、韓国や日本でも精力的な研究が発表されてきた。2000年代以降は、中央アジアの朝鮮人とサハリン残留朝鮮人を合わせて論じた研究も増えている。

日本では、和田 [1989; 2003]、岡 [1998a; 1998b]、クージン [1998]、半谷 [2004]、半谷・岡 [2005; 2006] らの研究によって強制移住の詳細、その後の中央アジアでの生活、パレストロイカ後の名誉回復、ソ連解体後の現状が明らかにされてきた。強制移住の前史にあたる、帝政期や革命・内戦・干渉戦期の朝鮮人社会の様相についても、サヴェリエフ [2005] や劉 [1985; 1987; 1993]、原 [1989] による研究がある。私たちは、旧ソ連地域の朝鮮人の歴史の多くを翻訳書も含めた日本語で知ることができ

る。後で詳しく述べる通り、本書の特徴は、さまざまな論点の比較研究を通じてソ連極東の朝鮮人政策と強制移住を論じていることである。朝鮮人と強制移住の対象になった諸民族を比較する試みは初めてではない。しかし、インタビューや同時代の新聞などの多くの史料にあたって帝政期からの長期的な状況を通観する研究はまれであり、論点の多様さと主張の明快さを含めて高い評価に値する。史料集を含む、旧ソ連諸国におけるこの四半世紀あまりの研究の蓄積が本書に結実しているため、多くの研究を日本語で読める日本の読者にとっても本書は価値ある研究である。

一方で、日本や韓国の研究は言語の問題からか、参照されていない。本書を踏まえたさらなる研究の進展は、露・韓・英の諸語に通じた日本の専門家の肩にもかかっている。

## II 本書の主旨

本書の主旨は、朝鮮人の強制移住を正当化した党指導部の思想的な背景が帝政期の為政者のそれと連続しているというものである。彼らの民族観は典型的な原初主義 (primordialism) にもとづくものだった。つまり、朝鮮人と中国人はロシアにとって文化的にあまりに異質であり、ソ連社会への統合は困難であるということである。また、著者は強制移住以外も検討の対象にしている。著者によれば、ロシア極東がソヴィエト化 (1922年) されて以来の朝鮮

人に対する一連の政策がこうした民族観にもとづくものであり、諸民族の平等と解放をうたったソ連の指導部においても原初主義的な民族観が再構築されつづけ、それが強制移住をもたらしたという。また、こうした民族観は党指導部の人々だけのものではなかった。それはソ連の人口の多数を占めるスラヴ系の大衆が広く共有するものであり、それが党指導部の民族観に反映されていたのである。

中央や地方の党指導者たちが抱いていた原初主義的な民族観は人種的な偏見と深く結びついていた。そうした東アジア諸民族への偏見はソ連社会に広く存在しており、著者はそれに関する多くの具体例を挙げている。そのなかで、もっとも重要なものは、探検家、作家、人類学者として名高いウラディーミル・アルセーニエフ (Vladimir K. Arsen'ev, 1872-1930年) の報告書である。

この報告書は1928年にアルセーニエフが極東地方の党指導部 (党ビューロー) に委嘱されて、極東地方の中国人と朝鮮人に関する諸問題を解説したものである。当地における民族研究の第一人者であるアルセーニエフが記したこともあり、この文書は、政策決定に大きな影響を及ぼした。この文書の主意は「朝鮮人の言語や文化はロシアにとってあまりに異質であり、朝鮮人をソ連社会に同化・統合させることはできない」というものだった。執筆直後はもちろん、アルセーニエフの死後の1930年代半ばにもこの文書が極東の党指導部内でふたたび回覧され、朝鮮人の強制移住を立案する際の有力な根拠になった。

朝鮮人に対する差別的な政策は帝政期に始まるが、ソヴィエト政権下でも続いていた。たとえば、農業集団化に際する土地配分においても明らかに差別的な政策が実行された。また、1937年とは別に、1920年代末から30年代半ばにかけては、沿海州南部の国境付近に暮らす朝鮮人の小規模な強制移住も実行された。

この時期、教育の普及とそれによるロシア語の習得を通じて党とソ連国家に忠誠を誓う若い朝鮮人党员たちが育っていた。また、ソ連国籍を取得したり、取得を望む朝鮮人も増えていた。しかし、こうした現実を無視するような政策が決定され、中央と極東の党指導部のなかで「朝鮮人はソ連に忠誠を誓わず、民族全体が日本のスパイである」という観念が再構

築されつづけていた。彼らが共有する原初主義的な民族観は個人と民族を区別しない。党と国家に忠実な朝鮮人党员が着実に増えていた現実は大きな意味をもたなかったのである。

短い間に日露戦争 (1904~1905年) とシベリア出兵 (1918~1922年) を経たロシア極東にとって軍国主義の日本は現実的な脅威であり、これを背景にして「朝鮮人は日本の潜在的なスパイである」という言説が広まっていた。しかし、こうした言説も現実に反するものだった。これらの戦争において、また、その後の時期においても、実際に日本軍や日本政府の命令で活動した朝鮮人スパイはごく少数にとどまった。しかも、そうしたスパイのほとんどは朝鮮や満洲の出身であり、「ソ連の朝鮮人がスパイである」という言説の根拠になるような事実はなかった。一方で、この時期の沿海州南部は、中朝国境の間島地方と並ぶ、反日独立闘争の拠点だった。シベリア出兵の日本軍は、とくに1919年以降にこれらの拠点を襲撃し、多くの朝鮮人を虐殺した。当然の結果としてソ連の朝鮮人には反日感情を抱くものが多かった。

こうした現実から目を背けるように、中央と極東地方の党指導部は「朝鮮人の全体が潜在的な日本のスパイである」という見解を強化し、強制移住という悲劇に至った。著者はそれらの思想的な背景に、帝政期のいわゆる黄禍論 (yellow peril) との連続性を見てとっている。

著者のこうした主張は、スターリン期の民族政策をめぐる議論に一石を投じるものである。なかでも、マーチン [2011] への問題提起は注目に値する。著者が異議を申し立てているマーチンの論点は、「ソヴィエト恐外症」 (Soviet xenophobia) という概念である。マーチンによれば、このソヴィエト恐外症は1920年代から「上からの革命」期にかけて成立した、外国の影響力を異常に恐れるイデオロギー的な心理傾向である。ソヴィエト恐外症はイデオロギー的なものであり、帝政期以来の他民族嫌悪とは関係がない。ソヴィエト恐外症によって定義される諸「民族」は、非文化的でイデオロギー的な意味を帯びた記号表現 (シニフィアン) に過ぎない (たとえば、「ドイツ人」や「ポーランド人」は「富農」という意味を指示する記号表現である)。1930年代には、このソヴィエト恐外症が集団化の際の富農追

放や国境地域の諸民族の強制移住を正当化するひとつの動機になっており、旧来の原初主義的な定義による民族観は大した意味をもたなかったというのがマーチンの見解である。

こうしたマーチンの見解に対し、著者はまず、先のアルセーニエフの報告書が極東の党指導部で1930年代半ばまで繰り返し参照されていた事実を挙げ、強制移住の政策決定に際しては、ソヴィエト的なイデオロギーとは縁遠い、原初主義そのものの民族観が影響力をもっていたと反論する。さらに著者は、朝鮮人に対する差別的な諸政策がソヴィエト化直後から始まっていたことや、差別的な民族観が帝政期から連続していたことなど、複数の論拠を挙げてマーチンを批判している。

マーチンの理論はそもそも多くの民族を包括することをめざしたものであるし、多くの論拠によるマーチンの議論もかなりの説得力をもつ。また、著者の批判は多岐にわたっているため、その適切さを評価するのは難しい。ここでは、著者が帝政期以来の朝鮮人に対する諸政策をつまびらかに関連づけて論じており、それをふまえた著者の主張は朝鮮人に関する限りで十分な説得力をもっているとのみ記しておく。

### Ⅲ 本書の特徴

本書の特徴は、いわば、共時的な比較研究と通時的な比較研究を高い水準で両立したことにある。前者は、朝鮮人政策をドイツ人、ポーランド人、ユダヤ人、中国人など、ロシア（ソ連）以外に民族的な故地のある諸民族と比較したことである。後者は、1937年の強制移住を、第一次世界大戦時の追放や1920年代から30年代にかけての小規模の強制移住と比較したことである。この時期には民族政策としてコレニザーツィヤ（現地化・土着化）政策が展開された。これは、言語教育や民族文化の振興を通じて民族エリートを養成し、諸民族をソヴィエト体制に統合しようとする試みだった。しかし、建前としては一貫して諸民族の平等がうたわれ、こうしたコレニザーツィヤ政策が極東の朝鮮人にも適用されていた一方で、彼らは、土地の配分、国籍の取得、自治的な行政単位の創設など、さまざまな点で不遇のままだった。著者はその理由をさまざまな比較研究

から探り、原初主義的な民族観が多くの場面で影響を及ぼしていたからだ、という結論を導いている。

著者の論旨は明快であり、論拠の史料の選択も適切である。主張の説得力を支えるのは、文書史料の徹底的な調査と長期の現地調査になる数々のインタビュー資料である。とくにインタビューが語る朝鮮人たちの暮らしの実相は、それ自体が民族誌的な資料としての価値をもつ。

本書の主題は、強制移住の要因とその背景をなす思想を明らかにすることである。一見すると、オーラル・ヒストリーが明らかにした朝鮮人たちの生活の記録は、この主題から外れているようにみえる。しかし、名のある一人一人の、ひとつひとつの家族の記録は、ソ連極東の朝鮮人社会の多様さを明るみに出した。

著者は、根強く残っていた早婚の習慣、朝鮮人村落の養蚕や稲作、漁業コルホーズの生産活動、さらには1930年頃まで存在していたウラジオストクのアヘン窟まで、朝鮮人たちの生活の実態を事細かに描き出した。たとえば、革命以来の朝鮮人エリート党员と、中口国境のハンカ湖付近に暮らし、満洲から越境してくる中国人馬賊に苦しめられていた農民では、日々の暮らしはもちろん、エスニック・アイデンティティも、ときには第一言語さえも異なっていた。

また、強制移住の実行に携わった治安機関の関係者には少数の朝鮮人職員が含まれており、そうした人々とその家族は、他の朝鮮人から遅れて1937年末に中央アジアに向かった。すでに1937年までに内務人民委員部などの治安機関では多くの朝鮮人職員が逮捕されていたが、そのすべてが追放されていたわけではなかった。また、強制移住させられたとはいえ、移住先での彼らは他の朝鮮人に比べてはるかに優遇されていたという。

実際には朝鮮人の社会のなかにはこうした多様さがあった。しかし、党指導部は、そうした朝鮮人たちをひとまとめに地域開発の労働力（colonial element）と見なし、日本のスパイと決めつけて強制移住を実行したのである。それだけに、党指導部の民族観の粗暴さは際立ち、著者の主張の説得力も際立っているのである。

本書は日本史の研究者に対しても興味深い論点を提示している。1920年代から30年代にかけての党

指導部は、時期による差こそあれ、一貫して日本を潜在的な敵国と見なし、そのことは同時期のさまざまな国内政策を動機づけてきた。満洲と植民地朝鮮に接し、いわば日本帝国に包囲されていた1930年代のソ連極東では危機感がいっそう強かった。一方で、ソ連極東はその豊富な資源に対して人口が希薄だったため、労働移民による開発の促進が帝政期以来の大きな課題だった。1937年の強制移住以前の小規模な強制移住の際には、国境付近に住む朝鮮人が同じ極東地方のマガダンやカムチャッカに移住させられ、漁業などに従事させられた。

ソ連当局にとってみれば、これは防諜と労働力不足を同時に解決する「名案」だったが、これは朝鮮人を「開発のための労働力」かつ「潜在的なスパイ」とみなす点で、いみじくも党指導部と帝政期の総督府の民族観には大差がなかったことを示し、著者の主張を裏づける例になっている。

帝政期以来、ロシア（ソ連）極東や満洲の日本領事館は当地の朝鮮人の動向を注視して記録してきた。朝鮮出身の朝鮮人のスパイを利用したスパイ活動の例もあった。さらには、日本政府自体が「赤化」、すなわち革命運動の波及を警戒し、日ソ間の人的交流をつねに厳しく監視していた。その反面、1925年の国交回復以降、軍事的な緊張関係の一方で、日本企業の資本や技術、労働力を利用する形でソ連極東の開発拡大が試みられていた。そうした動きのなかで、日本や植民地朝鮮とソ連極東の間の貿易も一時的に活発化していた。

こうした状況下でソ連の党指導部が喧伝した「日本の脅威」とはどれほど実情に即したものであったのか。著者はこの点に強い関心を抱いているものの、本格的な解明には日本の外交文書や陸海軍文書の研究が必要になる。その点で、こうした問題提起は、内外の日本史研究者が応じるべき課題である。

当時、ソ連領の北サハリン（北樺太）では、1925年の日ソ基本条約によって日本企業による石油開発が権益として認められていた。著者はこの開発に関係して1937年の秋以降も少なくとも2000人近くの朝鮮人が現場で労働を続けていたとしている。つまり、強制移住を後回しにしても、資源開発を優先したということである。日本人労働者との接触の可能性が大きい現場に朝鮮人たちを配した事実もまた、「朝鮮人がスパイである」という見解の根拠の薄弱

さを示している。そして、これは帝政期と変わらず、当局側が朝鮮人をなによりもまず「開発のための労働力」と見なしていたことを示している。

本書の主題は強制移住の要因の解明にあるが、その過程で朝鮮人を介したソ連極東と周辺諸地域の関係がつまびらかに描かれており、そうした事実のひとつひとつが興味深い。本書は同時期の満洲や朝鮮の研究にも資する研究である。

著者は現在、ロシア極東の華僑・華人史を執筆中だという。このテーマも近年の中口両国で着実な研究の進展がみられる。両国では歴史研究も社会調査をとまなう現状研究も数々の成果が発表されてきており、著者の近著も期待される。

### 文献リスト

- 岡奈津子 1998a. 「ソ連における朝鮮人強制移住——ロシア極東から中央アジアへ——」 樺山紘一ほか編『解放の光と影——1930年代-40年代——』（岩波講座世界歴史）岩波書店。
- 1998b. 「ロシア極東の朝鮮人——ソビエト民族政策と強制移住——」『スラヴ研究』(45) 163-196.
- クージン, アナトーリー・T. 1998. 『沿海州・サハリン近い昔の話——翻弄された朝鮮人の歴史——』岡奈津子・田中水絵訳 凱風社 (Кузин, А. Т. 1993. Дальневосточные корейцы: жизнь и трагедия судьбы. Южно-Сахалинск: Дальневосточное книжное издательство, Сахалинское отделение, Литгетатурно-издательское объединение «Лик»).
- サヴェリエフ, イゴリ・R. 2005. 『移民と国家——極東ロシアにおける中国人, 朝鮮人, 日本人移民——』御茶の水書房。
- 原暉之 1989. 『シベリア出兵——革命と干渉 1917-1922——』筑摩書房。
- 半谷史郎 2004. 「フルシチョフ秘密報告と民族強制移住——クリミア・タタール人, ドイツ人, 朝鮮人の問題積み残し——」『ロシア史研究』(75) 85-100.
- 半谷史郎・岡奈津子 2005. 「旧ソ連朝鮮人研究の現状——李愛俐娥著『中央アジア少数民族社会の変貌——カザフスタンの朝鮮人を中心に——』を読んで——」『アジア経済』46(10) 66-79.

- 2006. 『中央アジアの朝鮮人——父祖の地を遠く離れて——』東洋書店.
- マーチン, テリー 2011. 『アフターマティヴ・アクションの帝国——ソ連の民族とナショナリズム, 1923年~1939年——』半谷史郎監修 荒井幸康・渋谷謙次郎・地田徹朗・吉村貴之訳 明石書店 (Terry Martin 2001. *The Affirmative Action Empire: Nations and Nationalism in the Soviet Union, 1923-1939*. Ithaca and London: Cornell University Press).
- 劉孝鐘 1985. 「極東ロシアにおける朝鮮民族運動——『韓国併合』から第一次世界大戦の勃発まで——」『朝鮮史研究会論文集』(22) 135-166.
- 1987. 「極東ロシアにおける10月革命と朝鮮人社会」『ロシア史研究』(45) 23-51.
- 1993. 「シベリア戦争とロシアの朝鮮人」ロシア史研究会編『日露200年——隣国ロシアとの交流史——』彩流社.
- 和田春樹 1989. 「ロシア領極東の朝鮮人——1863-1937——」『社会科学研究』40(6) 235-286.
- 2003. 「ロシア沿海州からの韓朝鮮人の強制移住」徐龍達編『21世紀韓朝鮮人の共生ビジョン——中央アジア・ロシア・日本の韓朝鮮人問題——』日本評論社.

(新潟国際情報大学国際学部准教授)